

TEN

TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

Vol.41
SPRING 2019

特集

小学校で英語を学んできた生徒の 受け入れ準備はできていますか？

特集

小学校で英語を学んできた生徒の受け入れ準備はできていますか？

- 01 小学校外国語活動・外国語について理解してほしいこと 酒井 英樹
- 03 「聞くこと」からのアプローチで「やりとり」 長沼 久美子
- 04 音声で十分に慣れ親しんだあとの「書くこと」 長田 恵理

連載

- 05 英語教師のための基礎講座 授業づくりを楽しむために(3) 榎葉 みつ子
- 06 Essay Good News About Prepositions Matthew Miller
- 06 リクツで納得! 学校英文法の「文法」 侮れない形容詞の意味 巨理 陽一

SANSEIDO

小学校で英語を学んできた生徒の 受け入れ準備はできていますか？

2020年4月より、新しい学習指導要領に沿った教育が行われます。

小学校で外国語(英語)が教科になり、5・6年に年間70単位時間履修します。

学習指導要領の移行期間に入り、『We Can!』を使って学んでくる生徒は来年度中学1年生になります。

小学校でどのようなことを学びどのような力をつけて中学校にあがってくるのでしょうか。

本特集では、小学校の外国語活動・外国語の内容について、酒井英樹先生に解説いただき、長沼久美子先生と長田恵理先生にはご自身が実践されている外国語の指導をご紹介します。

01 総論：小学校外国語活動・外国語について理解してほしいこと 酒井 英樹

03 「聞くこと」からのアプローチで「やりとり」 長沼 久美子

04 音声で十分に慣れ親しんだあとの「書くこと」 長田 恵理

小学校外国語活動・外国語について 理解してほしいこと

酒井 英樹 (信州大学)



中学校で英語を教える皆さんに、小学校外国語活動と小学校外国語について理解してほしいことを7点紹介します。

1 言語活動を通して コミュニケーション能力を育成 することが求められている

今回の学習指導要領の改訂では、小学校、中学校、高等学校を通してコミュニケーション能力の育成を図ることがポイントとなっています。小学校外国語活動では「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力」を、小学校外国語では「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力」を育成することとされています。

また、その資質・能力を、言語活動を通して育成することと明記されました。どのようにして学習するのかという学習過程まで踏み込んで示されている点に改訂の特徴があります。新しい学習指導要領の中で、言語活動とは「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う」といった活動であると示されました。言語活動とはコミュニケーションそのものであると考えられます。コミュニケーションを通してコミュニケーション能力を育成することが求められています。

なお、小学校外国語活動では「聞くこと」

と「話すこと」の2技能の言語活動が扱われます。一方、小学校外国語では、教科化にあたり外国語によるコミュニケーション能力を総合的に指導するという点から、「聞くこと」と「話すこと」に加えて、「読むこと」と「書くこと」が扱われるようになります。

2 英語の知識は 体験や気づきを通して 理解することが求められている

小学校外国語活動では、言語や文化について体験的に理解し、日本語と外国語の音声の違いなどに気付くことが目標として挙げられています。小学校外国語では、音声に加えて、文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて気づき、理解することとされています。つまり、英語を聞いたり、読んだり、話したり、書いたりする中で、英語の特徴や決まりに関して、日本語との違いなどに気づき、その上で理解するようにさせることが求められており、明示的に教えるという方法は採られないこととなります。

3 慣れ親しんでから身に付ける こととされている

小学校外国語活動では、外国語の語句や表現を聞いたり話したりすることに慣れ

親しむことが目標とされています。その上で、小学校外国語では、聞いたり話したりすることを身に付けるようにすることが求められています。また、小学校外国語から「読むこと」と「書くこと」の指導が始まりますが、慣れ親しみからスタートすることが明記されています。十分慣れ親しんだ上で、身に付けるようにすることが重要であると考えられています。

慣れ親しみとはどういうことでしょうか。改訂後に発行された『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』(文部科学省 http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm)の中で、慣れ親しみは、単元で設定されている言語活動を行うために必要な語句や表現を、その単元の中で導入し、意味を理解させ、聞いたり言ったりする練習を行い、ねらった言語活動を行っている状態のことであると説明されています(p.160)。前の単元で覚えたり、できるようになっていたりすることを前提とせず、指導することです。また、単元が終わった後に、語句や表現を覚えたり、言ったり話したりできるようになっていることを期待しないということになります。

4 書いたり読んだりすること については 慣れ親しみの段階が 目標である

「読むこと」と「書くこと」については、小学校外国語から指導されると説明しましたが、正確に言うと、中学年の外国語活動でも、文字の名称の発音を聞いて、どの文字であるか特定するという「聞くこと」の言語活動の中で、文字は指導されます。小学校外国語では、大文字と小文字については、文字の名称を発音できたり、四線の上に配置を整えて書くことができたりすることが求められています。

語句や表現の読み書きについては、「慣れ親しむ」の段階が目標とされています（前項参照）。初見の英語のスペリングを見て発音したり、何も見ずに英語の語句や表現を書いたりすることまでは求められていません。例えば、月（例、MayやJune）を書くという言語活動がある場合、英語の音声聞いて意味を理解したり、月を英語で言うことはすでに経験していることが前提となります。また、その単元で、月の英語が文字として示され、その英語を参考にしながら月名を書く（正確には書き写す）という言語活動をすることになります。モデルが示されていないところで、月を書けるようになるところまでは求められていません。もちろん中にはそれができる児童も現れると思いますが…。

5 小学校では、文法ではなく 「表現」や「文構造」が 扱われる

小学校外国語では、語句や「表現」を用いて伝え合うことができるようになることが求められます。一方、中学校外国語では、語句や「文」を用いて伝え合うことができるようにとされています。また、中学校外国語では、文法を理解することが求められていますが、小学校外国語では「文構造」に気付き、理解するとされており、文法という言い方が用いられていません。これは

どのような違いなのでしょう。

「表現」とは、固まりとして用いられる決まり文句や定型表現のことです。チャンクやパターンとも呼ばれます。お礼を言う時には“Thank you.”を、“How are you?”と尋ねられたら“I am fine.”という表現を固まりで用います。得意なことを表す時には、“I am good at ….”や“I can ….”というパターンを用います。“Thank you.”が言えるからと言って、“I thank Mary.”や“I thanked you.”というように、目的語を変えたり、時制を変えたりして用いることはできません。“I can”という語句と、動作を示す語句（play basketball, sing well, run fastなど）を組み合わせることはできますが、canが助動詞であることを理解したり、助動詞の後に動詞の原形が用いられることを理解したりしているわけではありません。一方、中学校外国語では、文を生成したり理解したりするための規則である文法を理解し、その文法を活用して、「文」を自ら作ることによって話したり書いたりできるようにすることが求められます。小学校外国語ではそこまで指導しません。

“I am fine.”という表現は、「主語+be動詞+形容詞」という文構造を持つと言えます。小学校外国語では、文法ではなく文構造が指導されるというのは、そのような文構造を持つ表現を扱うということであり、その規則を扱うのではないということを意味します。

6 コミュニケーションを 行う目的や場面、状況に応じて 言語使用することが 求められている

小学校外国語では、「思考力、判断力、表現力等」に関する資質・能力について、コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて、聞いたり、読んだり、話したり、書いたりすることが求められています。これは、中学校外国語と同様です。小学校外国語活動では、児童が外国語を学び始めたばかりであることから、「思考力、判断力、表現力等」に関する目標として、「身近で

簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。」とされています。まずは外国語で聞いたり話したりすることから始め、思考力や判断力、表現力を活用することのできる言語活動を体験させることが求められています。「コミュニケーションを行う目的や場面、状況」に応じて外国語を用いることができるようにすることは、教科として系統的に指導する事柄であると考えてよいでしょう。

小学校外国語における「思考力、判断力、表現力等」は基本的な内容となっています。例えば、読む際に、音声で十分慣れ親しんだ語句が書かれているものを読み、イラストや前後関係の情報を活用して、その意味を推測しながら読むことも思考力の1つとされています。また、伝えたいことが適切に伝えているかという点から判断し表現するという点で、語と語の順番を意識して書くことも、「思考力、判断力、表現力等」の1つとして挙げられています。

7 移行期間における 学習経験歴や学習内容は 小学校によって異なる

最後に、移行期間のことについて述べます。移行期間中に各学年で行う最低時間数が示されました。2018年から3年生と4年生は15～35単位時間、5年生と6年生は50～70単位時間、外国語活動や外国語の内容を実施しています。学校によって学習経験歴が異なることに留意する必要があります。最低時間数を採用した小学校の卒業生は、2023年度卒業生まで毎年学習経験歴が異なることとなります。また、学校や年度によって、Hi, friends! を使って学ぶ児童や、移行期間用の教材 Let's Try! や We Can! を使って学ぶ児童、そして2020年度からは小学校外国語の検定教科書を用いて学ぶ児童など、毎年学習内容が異なります。今まで以上に小中連携（特に情報共有）が重要になります。

本稿では小学校外国語活動・外国語について7点に絞って紹介しました。

「聞くこと」からのアプローチで「やりとり」



長沼 久美子
(横須賀市立鶴久保小学校 教諭)

はじめに



小学校外国語活動では、「聞く・話す」が重点的に扱われています。単語や文章のもつ音を知ることが、言語習得の入り口と考えられているからです。

移行期間中の小学校における外国語の最低配当時数は、3・4年生が各15時間、5・6年生が各50時間。高学年50時間というのは、音楽や図画工作と同じですが、文部科学省からは、中学年に*Let's Try!*、高学年には *We Can!* が配られています。横須賀市では、独自の小学校外国語活動カリキュラムに、*Let's Try!* や *We Can!* の内容を組み込んで移行措置期間の授業を進めています。本稿では、それらの実践から、聞くことからのアプローチの視点を3つ紹介します。

実践



① 意味のあるやりとりをする

学習内容と出会う段階から、意味のあるやりとりを意識します。例えば、リアルな内容のやりとりです。教科書にある例文を読むのではなく、本物の情報を通して、英語を内容のある「ことば」として位置づけ、児童を会話の世界に引き込みます。このようにアプローチすると、児童は自然と耳をそばだて、内容を予想するようになります。

英語は、セリフを覚えるものではなく、コミュニケーションであるという視点が意味のあるやりとりには欠かせません。

例) *We Can!* 1 —Unit 2

When is your birthday?

T: My birthday is September 8th.

○○sensei(AET)'s birthday is July 28th.

××sensei(JET)'s birthday is June 30th.

いくつかの例文を聞いているうちに、児童が学習内容に気付きます。「あ、誕生日のことを言っている」。

T: When is your birthday?

教師の表情を見ながら、誕生日を聞かれているのかなと推測が働き、児童が会話に引き込まれていきます。

C: ...nnn 2月10日。

T: February 10th?

C: Yes.

T: Her birthday is February 10th. (クラス全体に向かって)

児童が英語で誕生日を言えなくても、教師が言い直していくことで、自然と英語表現を学ぶことができます。

② やりとりの中で足場をかける

英語の学習では、児童達が言いたいことと言えことの乖離が起きることもあります。「言い方を知らないから言えない」。そのような時は、教師側が言葉を引き出してあげられるような手立てを取ります。

例) *We Can!* 1 —Unit 8

What would you like?

T: What would you like for your main dish?

C: ...nnn ステーキ。

T: b, b, b, beef...

児童は、ステーキと言いたいけれど、言い方が分からない。このタイミングで、気付きを促します。

C: Beefsteak, please.

T: OK. You would like a beefsteak.

「beefsteak」を繰り返すことで、自然と耳からの音が残ります。

このように、会話のやりとりの中で足場



がけをすることで、児童は今、その場所で「知りたい」英語表現を聞き、自ら気づき、学びを深めていきます。すべてを教えるのではなく、児童が必要としているときに少し手伝う。こうしたやりとりの中での足場がけによって、聞くことからの学習が進むようになるのです。

③ アウトプットは急がない

「好きなスポーツについて学習するのか」と、児童が理解しても、初めて耳にすることはやフレーズを扱う時のアウトプットは急ぎません。会話に出てくる人や状況、設定などを変える、映像や音声を使う、クイズやゲームを取り入れるなど、内容に関わる会話のやりとりが聞こえてきちゃうような状況をくり返し作っていきます。

「聞くこと」が十分に足りていれば、児童から、「もうできるよ!言えるよ!はやくやりたいよ!」という声が必要出てきます。

例) *We Can!* 2 —Unit 6

What do you want to watch?

T: I want to watch a swimming race.

I like swimming. It's exciting!

まとめ



聞くことからのアプローチは、児童目線です。「聞きたい」「知りたい」「話したい」のように、学習意欲と深く結び付いているように思います。十分に音声に親しむことができた頃、会話や発表をすることで、児童達が無理をすることなく、楽しんで学習に取り組めるようです。

そのために、「教師と教師」→「教師と児童(全体)」→「教師と児童(個)」→「児童(個)と児童(個)」といった段階を踏みながら、音声に親しみ無理なく聞く経験を積めるようにすることも大切だと考えています。

音声で十分に慣れ親しんだあとの「書くこと」 ——目的のある言語活動の一部として



長田 恵理
(國學院大學 准教授)

はじめに

現行の小学校学習指導要領下の外国語活動は音声中心で、文字に関してはアルファベットの大文字小文字の識別まででした。しかし、今後は「聞くこと」「話すこと」を中心とした活動を通じて外国語に慣れ親しみ、外国語学習への動機付けを高めた上で、段階的に「読むこと」「書くこと」を加え、総合的・系統的な学習を行いながら中学校への接続を図ることが重視されています(文部科学省, 2017)。本稿では、特に「書くこと」について、目標を参照し、移行期用教材を用いた実践を紹介しします。

「外国語」の目標

「書くこと」について注目すべきは「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現」を用いて、それらを書き写す、あるいは、例文を参考にして書く、という点です。例えば“Where do you want to go?” “I want to go to Italy.”といったやりとりを十分にしたのち、手本を見ながら“I want to go to Italy.”の一部または一文を書くという流れとなります。また、「言語活動に関する事項」の中では、ただ練習のために書くのではなく、相手に伝えるなどの目的のある言語活動の一部として「書くこと」が位置付けられています。相手に伝えるなどの目的を持って書くとは、例えば文字を用いることによって「目の前にいない相手」に伝えることや、相手に口頭で伝えるためのメモの役割として書くことが考えられます。

実践

文部科学省では5、6年生に向けて移行

期用教材 *We Can!* の冊子及びデジタル教材、これに付属するワークシートを作成・配布していますが、「読むこと」「書くこと」に関する特徴として、次の3つを挙げています(「新学習指導要領に対応した小学校新教材に係る説明会」(平成29年9月21日))。

- ・ 細かなステップを踏んだ、読む・書く活動
- ・ ゆっくり文字を読んだり書いたりする活動
- ・ 読んだり書いたりする必然性のある活動

次に、筆者が今年度授業見学をした中で、6年生用 *We Can! 2* を使用した実践例を紹介しします。

① Unit 4 —I like my town.

チャンツなどを用いて表現の口頭練習をとりいれながら自分の町にあるもの、ないもの、ほし



いものについてやりとりを楽しんだ後、第3時にワークシートに“(町名) is nice. We have a station. We don't have a park. I like soccer. I want a big park.”などと例文を参考に書き込みます。第4時でこのワークシートを手に持ち、自分の考えを友達に伝え合うとともに、聞き手はその考えがよいと思った場合には Good idea! などと反応していました。ほとんどの児童が手元のワークシートは確認のためにたまに見る程度で、自分の書いたワークシートを相手に見せながら話す児童もいました。このワークシートは廊下に掲示すれば、他クラスの児童にも読んでもらえるでしょう。

② Unit 5 —Summer Vacation

この単元では、動詞の過去形 went / saw / ate / enjoyed, さらにbe動詞の過去形も登場します。文法事項に注目すると中学2年レベルの内容ですが、Unit 5が

実施されるのは夏休み明けであり、児童の日常生活に直結した話題を英語で表現することを目指します。児童はgoの過去形がwentであると覚えるのではなく、「行った場所」を伝えるための“I went to ...”というチャンクに慣れ親しみます。ここでも第1時では“I went to (the sea).”のみ、第2時以降、“I enjoyed (fishing).”と楽しんだことや“It was (fun).”といった感想など、スモールステップで「言いたいこと」を積み上げていきます。単元の最後には自分の夏休みの思い出を伝えて「来年の夏と一緒に過ごしたいと思う友達を増やす」という活動が設定されています。児童はこれまで音声で慣れ親しみ、一文ずつ書きためてきたものを改めて書き写し、友達とやりとりをして、“Let's go to the sea together next summer vacation.”などと誘っていました。自分の思いを書き写したものがヒントとなって、やや分量の多い発話でもなんとか伝えることができていました。

まとめ

以上のように、5,6年生で新たに加わった「読むこと」「書くこと」ですが、あくまでも「慣れ親しんだものを読む」であり、「手本を参考にしながら書き写したり、文の一部を置き変えて書いたりする」のであって、音声で触れていないものを突然書くような活動ではありません。音声で十分に慣れ親しんだものを「読んだり」「書いたり」する中で、音と綴りの関係や文構造に気付いたり、文を読んでみようとする意欲が育っていくと考えられます。こうして育った読み書きに対する意欲が中学校での外国語学習につながっていきます。

【参考文献】
文部科学省(2017).『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編』

授業づくりを楽しむために (3)

— 明日のための「振り返り」 —

榎葉 みつ子 Kashiba Mitsuko (広島大学)

① はじめに

授業の振り返りが大事なことは知っているけれど、やり方がわからない、また、継続が難しい、とよく聞きます。

そもそも、なぜ授業を振り返るのでしょ
うか。それは、授業をもっとよくするためです。
今の自分の授業を深く理解し、気づいたこと
を、次に活かすために振り返るのです。

失敗を反省するためではなく、授業改善
や自分の成長のために役立つ振り返りの
方法について、今回は述べてまいります。

② 録画した自分の授業を見る

まずは、自分の授業を録画してみてください。
そして、自分では決して見ることで
できなかった、授業中の自分に出会って
ください。どんな表情や声で生徒に接して
いますか。指示や説明はわかりやすいですか。
生徒の立場から見ること、少し自分に自
信がもてたり、意外な癖に気づけたりする
ことでしょう。

次に、生徒に目を向けてみましょう。授
業中、教師はいつものことを同時に行っ
ています。そのため、どれだけ注意して
いても、生徒全員の反応を見とることはでき
ません。教室の後ろの方にいる生徒の反
応などは、特に見落としがちです。目立た
なかった生徒が、実際にはいろんな表情や
反応をしていることに気づくことでしょう。

このように、録画を見ると自分の授業を
客観的にとらえ直すことができます。授業

で実際に起こっていることへの認識が深ま
り、自律的な成長のために必要なメタ認知
力を高めることができます。

③ 自分で「授業研究」をする

次は、振り返りを積極的に活用する方
法を考えてみましょう。

振り返りを授業改善に活かす方法の一つ
に、予想通りに展開しなかった部分に焦
点を当てる授業研究(吉崎, 2018)が
あります。どのようにして課題の発見から
解決策の選択にいたるのかを整理すると、
次のようになります。

- (1) 教師の期待と生徒の反応のズレしている
ところに着目する。
- (2) そのズレが生じた理由を考える。
- (3) 授業計画や手立てなど、変更すべき点
を特定する。
- (4) 修正案や代替案を考える。

授業を振り返ると、いろいろなことが気
になって、何から手をつけようかと迷います。
上述の手順に従って、目標の達成を見とる
場面や工夫の効果が表れる場面など、教
師の期待の大きな場面における生徒の反
応に注目してみましょう。そこに課題を見
出すことができれば、それは振り返りの成
果だと言えます。

④ 協働で授業研究をする

ところが、課題を発見しても次にどうし
ていいかわからないなど、一人で行う授業

研究には、残念ながら限界があります。

授業研究に慣れないうちは特に、同僚
や教員仲間の力を借りて、協働で実践する
ことをお勧めします。

前述の吉崎(2018)の授業研究に限らず、
一人でも、だれかと協働して行う授業
研究の方がはるかに効果的なのは、他者
からの多様な視点や有益な知識が得られ、
授業の理解や改善につながりやすいからで
す。そして、授業研究の効果をより一層実
感できるからです。

また、協働で授業研究することには、助
け合い高め合う関係を仲間と築くことが
できるという、もう一つの良さがあります。
そのような環境にいると、お互いに刺激を
与え合って、実践への意欲を維持しやす
くなることでしょう。

⑤ おわりに

最近では、目の前の仕事をこなすことに追
われ、学びの専門家たるべき教師が、自
分の学びから疎外されているように思えて
なりません。

自分の授業から学び、よりよい授業づく
りを試みることは、かける時間や労力以上
の成果をもたらします。将来のために貯蓄
や投資をするように、生き生きと教師を続
けるための、学びの時間を生み出してほし
いと願います。

【引用文献】

吉崎静夫(2018)「リフレクションは授業研究の一部である」『看護
教育』第58巻第7号、496-500頁



Matthew Miller (Tokyo Woman's Christian University)

Prepositions are one of the most challenging components of English. They are small words, but they can be hugely frustrating.

Intimidatingly, English has about 150 prepositions and it seems like for every rule, there is an exception. Although only two letters are different, the sentences *He ran in the hall* and *He ran into the hall* have distinct meanings. What's more, native speakers sometimes do not agree on prepositions. For example, would you say *I ate lunch at the park* or *in the park*? If you enter your park through a gate, you could say *in the park*. Someone who imagines a park as a wide-open area might choose *at*. There are regional differences as well. In the US, people usually say *different from/than* and will cringe when someone from the UK says *different to*.

Don't be discouraged, there is good news. As often as not, listeners will understand the speaker in spite of an inappropriate preposition. More importantly, there are effective ways to teach proper usage through awareness, practice, and self-correction.

Illustrations and kinesthetic activities are suitable for

teaching prepositions of place (*above, below, etc.*). Learning prepositions in groups and patterns improves recollection. For example, teach *in, on, and at* together with time and place. Show that *in* is used for general ideas (*in the 1980's, in Korea*), *on* for more specific concepts (*on Monday, on the street*), and *at* for very specific things (*at the moment, at home*).

Of course, practicing through writing and speaking is critical, but remember to also provide students with reading and listening content so they may learn from context. The more they hear/see prepositions, the better they will become at knowing what sounds/looks natural.

Teaching self-correction is key to becoming independent students and English-speakers. Point out students' spoken and written mistakes, but allow them to identify, research, and correct themselves with partners or groups. This style of active learning will guarantee autonomy, retention, and accuracy.

Lastly, some grammarians may warn you against ending a sentence with a preposition. However, many English speakers will tell you it is OK to.

NATTOKU!

3

リクツで納得! 学校英文法の「文法」 巨理 陽一 (静岡大学)

侮れない形容詞の意味



英語で相手の年齢を尋ねることは基本的に良しとされず、*NEW CROWN*には登場しないものの、“How **old** are you?” という表現に出会った時、年寄りじゃないのにどうして‘old’? と疑問を発する生徒がいる。この感覚は意外に鋭い。私の38歳という年齢に対して、オランウータンの寿命の話をしているのであれば、“He is **old**.” とは言えないが、“He is **older** than I thought.” とは言える。同様に“He is **young**.” と言うのも適切ではないが、“He is **younger** than the chief editor.” とも、“He is the **youngest** in his department.” とも言える。

つまり、上の比較表現が表しているのは、「年齢」という尺度上の比較対象との相対的関係であって、“He is **old/young**.” や ‘an **old** bicycle’ のような「年老いた」「若い」「古い」という形容詞の絶対的意味ではない。Tom と Koji の年齢の比較は80代同士でも構わないし、その足の速さの比較はカタツムリと亀の競争でも成り立つ。だから、“Getting **better**, but not **well**.” (前より)良くなってきているけど、十分回復しているとは言えない

という言い方が可能なのだ。“How **old** are you?” の **old** も、“He was only 18 years **old**.” の **old** も、この、尺度を示すラベルとしての用法である。

程度を尋ねたり比較表現で比べたりできるということは、その形容詞の意味に、*alive* と *dead* のような0か1の関係ではない、度合いがあるということだ。「少しだけ死んだ」や「以前より死んだ」という状態は複雑なSFの設定でもない限りあり得ないが、「深さ」や「速さ」について「少しだけ深い」や「以前より速い」という状態は容易に想像できる。実は、絶対的意味で形容詞を用いる際も、われわれは社会的慣習や主観的信念などの暗黙の基準との比較をしている。例えば ‘a **deep** cut’ の **deep** は、「切り傷の一般的水準に照らして度合いがはなはだしい(と話者は見なしている)」ということである。

冒頭の生徒の疑問が鋭いと思うのは、実はこの相対的・絶対的意味の関係が形容詞によって異なるからだ (Cruse, D. A. (1986). *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.)。いわゆる反意形容詞に

は、比較表現で(a)どちらも相対的意味を表す *deep* と *shallow* タイプ、(b)片方は相対的意味、もう一方は絶対的意味を表す *good* と *bad* タイプ、(c)どちらも絶対的意味を表す *hot* と *cold* タイプの3つがある。つまり *hot*, *cold* は、暑さ・寒さの度合いがはなはだしいという判断を常に表明しており、比較表現であっても同時に両立はしない。*Popular* は(c)に属するので、“*Soccer is **more popular** than basketball.*” をバスケットボールの側から “*Basketball is **less popular** than soccer.*” と言うことはできるが、どちらも両スポーツがある程度人気であることを前提としており、不人気同士の比較を表す “*Basketball is **more unpopular** than soccer.*” とは全く異なる。同様に、“How **bad** is it?” と訊けばそれはひどいと思ってその程度を訊いているのだ。こうして見てみると、必ずしもその形容詞の絶対的意味を含意しない “How **good/deep** is it?” のほうが特殊と言えないこともなく、“How **old** are you?” を「どのくらい年寄りなのか」と解釈する生徒は ‘**better** than you think’ (侮れない)なのである。

2020年、ついに小学校で外国語が教科化 教員を目指す学生はもちろん、現任教員の学び直しにも最適の1冊

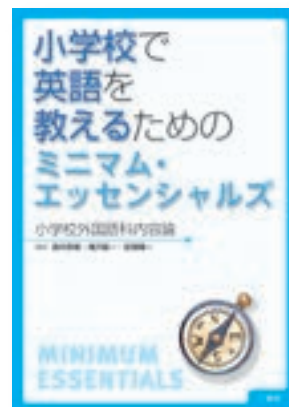
小学校で英語を教えるための ミニマム・エッセンシャルズ

小学校外国語科内容論

酒井英樹(代表)・滝沢雄一・亘理陽一 [編著]

A5判 208頁 1,900円(税別) ISBN 978-4-385-36138-3

指導法だけで十分ですか? 「小学校で育成を目指すコミュニケーション能力って?」「子どもはことばをどう身に付けるの?」「音声、文字、語順って言われるけど英語はどのような特徴の言語?」「児童文学はどう扱ったらよい?」「異文化理解をどう進める?」これらの疑問に答える専門的知識を概説します。



NEW CROWNデジタルテキストをお使いの先生方へ

教材の更新(アップデート)について



日頃、デジタルテキストは問題なくご利用いただけておりますでしょうか。

NEW CROWN指導者用デジタルテキストは2016年4月の販売開始後、3回の教材アップデートを実施しております。(2016年7月/2017年3月/2017年7月)

最新の教材では機能改善や不具合の解消に対応しております。教材のアップデートがお済みでない場合には、是非アップデートをご実施いただきますようお願い申し上げます。

教材アップデート手順【オンラインの場合】

- ① CoNETSビューアを起動します。
- ② 「管理者」でログインをし、セットアップの画面を開きます。
- ③ 「教材管理」を選択し「ライセンス情報更新」ボタンをクリックします。
- ④ 【Windowsの場合】「教材をディスクから取得」のチェックを外します。
- ⑤ 教材の「インストール」ボタンをクリックして最新の教材をダウンロードします。

※教材のダウンロード対応時間帯は、大変恐縮ながら【平日の8:00~20:00】となります。

※手順の詳細は三省堂教科書・教材サイト(<http://tb.sanseido-publ.co.jp>)にございます先生向けのサポートサイト「三省堂プラス」でもご確認いただけます。
(「三省堂プラス」をはじめご利用になる場合には会員登録が必要になります。)

▶▶ 動作速度でお困りの場合には...

紙面以外のコンテンツをご利用いただけるオプション版の「教材リンク集」のご用意がございます。「教材リンク集」では動作速度の改善が強く見込まれますので、ご入用の場合には、下記のメールアドレスまでご連絡くださいませ。

株式会社三省堂 デジタル教科書サポート info-tbdt@sanseido-publ.co.jp

三省堂 教科書・教材サイト <http://tb.sanseido.co.jp>

教科書・教材そして学習参考書のご案内、Webコラム、研究会開催に関する情報等をご紹介します。

三省堂

〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町2-22-14 TEL 03(3230)9411(編集)・9412(営業)

■大阪支社	〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地2-5-3	TEL 06 (6341) 2177
■名古屋支社	〒460-0002 名古屋市中区丸の内3-21-31協和丸の内ビル2F	TEL 052 (953) 9211
■九州支社	〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1	TEL 092 (531) 1531・1532
■札幌営業所	〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1ラスコム15ビル3F	TEL 011 (616) 8722